ISSN 0915－5171

グリーントピックス

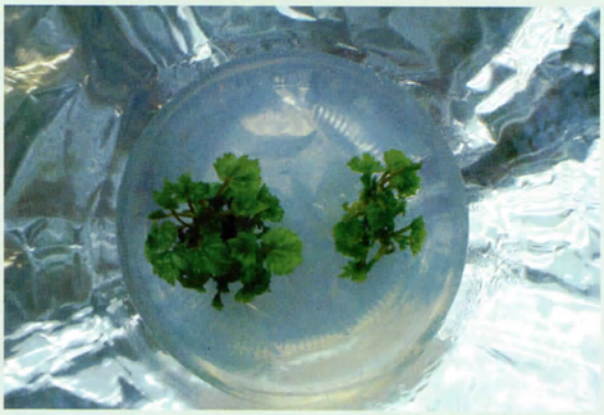
北海道立林業試験場　No.41

ホロムイイチゴの増殖技術の開発

写真－1　ホロムイイチゴの群落（6月）

写真－2　雄株の開花（6月）

写真－3　果実（8月）



写真－4　組織培養によるクローン増殖

ホロムイイチゴ（学名：*Rubus chamaemorus*）は、福島県以北の湿原などに自生するキイチゴ属の植物です（写真―1）。石狩の幌向湿原で発見されたことに由来する名前は“幌向苺”と書きます。北海道の地名を名前に持つ植物の中でも、食用になる数少ないひとつです。雄株と雌株があり（写真―2）、雌株に付く果実は7～8月にかけて成熟します（写真―3）。北欧では“ベリーの王様”と呼ばれて、果実は生食のほかに、ジャムやジュースなどに利用されますが、これまでに日本では、利用されることも、栽培されることもありませんでした。昨今、自生地の湿地は乾燥が進み、植生の変化が急速に進んでいることを背景として、本州では絶滅危惧種に指定されています。これらのことから、組織培養によるクローン増殖技術を開発し（写真―4）、民間企業へ技術移転しました。現在、この増殖技術を活用したホロムイイチゴの保護や有効活用に関する取り組みが進められています。

（管理技術科）